

子宮がん検診(神奈川方式)

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年日母設立20周年を記念し神奈川県産婦人科医会との協力事業としてスタートしたものである。県下の医会会員医療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について鏡検・判定を行い、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

前頁の車検診が行政主導で行われているのに対し、神奈川方式は産婦人科医会会員主導で行われており、両者相補って本県の子宮がん検診の骨格をなすものであるから益々の充実が望まれる。

19年度は、頸部検診において、検査数33,435件(前年比+1187)、受診者数31,358名(前年比+1133)とも増加している。

精度管理については、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の情報処理部により行われ、県産婦人科医会のご協力により年一回の報告会を開催している。

方 法

実施方法については昭和53年に日母(現日産婦医会)がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化(日母方式)答申を踏襲しつつ、平成18年度改正のがん検診実施のための指針に従っている。従って対象者は30歳から20歳以上に引き下げられ、問診、視診、内診を行うこと、コルポスコープ診を初回から細胞診と併せて使用することが奨められている。

体がん検診は頸がん検診受診者の内、問診の結果最近6ヶ月以内に不正出血、月経異常、褐色帯下のいずれかの症状を有していた者の中から希望者を対象に内膜細胞診を行っている。

子宮頸がん検診

平成19年度の子宮頸がん検診受診者は31,358名(前年度30,225名)で平成15年度26,504名を谷として年々増加傾向にある。最近の若年者子宮頸がんの増加傾向に対応して平成18年度の指針改正で検診対象にくみ入れられた20歳代は4,696名(前年度4,656名)で早くも固定化が心配される。

がん確定者は59名、発見率0.19%(前年度70名、0.23)で減少した。内訳は頸がん52名、体がん5名、その他のがん2名であった。その他のがんの内訳は膀胱がん病期不詳と卵巣がん病期不詳である。

年齢階級別がん確定数は、29歳以下5名、30歳代20名、40歳代14名、50歳代2名、60歳代5名、70歳以上13名であった。50歳以上の高年齢層に体がん(5)、その他のがん(2)の発見数が多い傾向は変わらないが、進行期頸がんについては50歳以上(7)も50歳以下(7)も同数で年齢差はなかった。

30歳代以下の若年層と40歳代以上の比較では、30歳代以下の受診者数13,440名(総数の42.9%)、がん確定数25名(発見率0.19%)に対し、40歳代以上の受診者17,918名(総数の57.1%)、がん確定数34名(発見率0.19%)で発見率に差はみられなかった。

病期別的には、30歳代以下では、発見された頸がん25名中、0期21名、Ia期1名、Ib期以上2名であって早期がん中心、40歳以上では34名中、0期9名、Ia期4名、Ib期以上12名、腺がん1名、病期不詳1名で進行がんが多い傾向は変らなかった。

頸部腺がんは増加が指摘されているにもかかわらず、今年も発見者は1名のみであった。

異形成については、確定者数182名、発見率0.58%(前年度175名、0.57%)で微増した。内訳は軽度異形成95名、中等度異形成46名、高度異形成41名、腺異形成0名で高度異形成の確定率が高かった(前年度28名)。

年齢階級別では30歳代以下の確定数が119名(発見率0.89%)、40歳以上が51名(発見率0.28%)であって、若年層の発見率が高く全年齢発見率は昨年度と変わりなかった(0.58%)。

子宮体がん検診

平成19年度の体がん検診受診者は8,164名(前年度7,638名)、頸がん検診受診者数の26.0%(前年度25.3%)であった。

がん確定者は28名(発見率0.34%)。内訳は子宮体がん24名、体がん以外の悪性腫瘍として卵巣がん2名、膀胱がん1名、原発不明がん1名が発見された。その他に前癌病変としての内膜増殖症は17名が発見された。

年齢階級別がん確定数は、40歳代2名、50歳代14名、60歳代7名、70歳以上5名であった。増殖症の年齢分布は30歳代1名、40歳代6名、50歳代7名、60歳代2名、70歳以上1名であった。

病期別的には、I期の早期がん16名、II期以上の進行がん5名、病期不詳3名であった。

関係の集計表は92頁に掲載